



# 歳時記のある暮らし

二〇二二年

《六月》

雨雲のもと紫陽花が美しく映えるころとなりました。

皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

黒、南風(くろはえ)と呼ばれる暖かく湿った風が梅雨をもたらします。

此系陽花や帷子時(かたびらとき)の薄浅黄(うすあさぎ) 松尾芭蕉

衣替えのころの句です。「帷子とは汗とりとして着る着物のことで、「薄浅黄」とは若い苧心

の色を淡くした青緑色です。江戸時代の武家社会では衣替えは年に四回あり、期間も着る素材も厳格に定められていました。季節が変わると手持ちの着物をほどこいて生地傷みをなおし、虫干しをして次の季節に備えることで着物を大切にしていました。

「此系陽花が咲き、今年も帷子を着る季節がやってきた。ちようど此系陽花も帷子も同じ薄、浅黄色をしている」という俳句ですが、紫陽花は季節が進むにつれ淡い青色から此系へと色を深めていきます。一方、帷子は暑くなるにつれ、青から薄青さらに白へと薄くなっていきます。この俳句は、自然の理で濃くなっていく紫陽花の色と、人の世のしきたりで薄くなっていく着物の色とが時空で出会い擦れ違っていくなかで、一致する瞬間を切り取った秀作です。

雨が似合う此系陽花や苜蓿、川面や草むらも飛び交う虫(はたは)も、潮干狩りに見られるアサリやマテガイなどを採集するのもこのころです。そして雨は米作りにとっても恵みそのもの。水を張った棚田では、鏡のように早景色が映り日本の原風景を叶えます。苗が育った緑色の田んぼでは、螳螂(かまきり)や虫が活動します。螳螂は農作物には手をつけず、害虫を捕まえてくれるありがたい存在です。

虫は川や田んぼにいるイメージが強ですが、約二千種類もの虫の中で、水辺に生息するのは、わずか十種類ほどといわれます。その中に、源氏虫や平家虫がいます。源氏虫という名前は、平家打倒の夢に破れ、宇治の平等院で無念の最期を遂げた源頼政の七霊が、夜空に飛び舞う様子を虫にたとえたといわれます。一方、源氏虫より小さい平家虫は、

(裏へ続きます)

源平の合戦で源氏に負けた歴史的背景から名付けられたといわれます。源氏虫ありきの平家虫の名は、少し悲しい由来です。

梅雨の時期は、どんよりした天気<sup>に</sup>気持ち<sup>が</sup>左右されがちですが、そんな時期こそ自分の心が満たされるような雨の日の過<sup>ぎ</sup>ごし方をしたいものです。

六月十六日から六月二十日ごろは、七十二候の「梅子黄<sup>うめのみきはむ</sup>」。雨雲りの空のもと、黄色い梅の実が灯りのようにほんのり灯るようです。梅干しや梅酒づくりなどの梅仕事はこの時期の風物詩。梅の保存食作りは、家じゅうに爽やかな香りをもたらします。

「青井雨読」という言葉もあるように、文学や詩に親しむことも素敵ですね。雨を単なる自然現象から昇華させ、心的情景を映す手段として用いている物語があります。

『源氏物語』の「桐壺<sup>きりつぼ</sup>」では、桐壺更衣が梅雨時に亡くなったとか、「帚木<sup>ははきぎ</sup>」の「雨夜の品定の翌日は梅雨明けだったなど、天気図がなかった平安時代、此系<sup>しけい</sup>式部は気象を観察して物語の情景に活かしました。「小糠<sup>こぬか</sup>雨<sup>あめ</sup>」という言葉もありませんが、音もなく静かにそぼ降る細かい雨は、単刀直入に「別れが辛い」と言わなくても切ない別れを連想させます。

宮沢賢治の作品に触れることも、肩の力が抜けてつ元気が湧いてくるのでおすすめです。賢治が亡くなる二年前、病床に伏しながら書き残した「雨ニモマケズ」という詩があります。彼は、花巻農学校の教員を経て農民の幸福のために稲作の指導などに力を注いでいました。大自然の脅威のもとでは人間の力は弱く、雨、風、雪、暑さに勝つのではなく、「負けない」とあります。理不尽を嘆くのではなく、泣きながらも現実を受け入れて立ち上がる、そのために丈夫な身体としなやかな心を持ち合わせたい、そんな願いが伝わってきます。肺の病気が悪化して起き上がることもままならない状態で、生まれ変わったらこうありたいと、死を後ろ向きには捉えない賢治の強さも感じます。

六月二十一日は夏至。この日を境に日照時間は少しずつ短くなっていきますが、暑さはこれからです。湿度も高いため熱中症にお気をつけください。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当

久郷直子

